

に存するもの、外に新義を唱ふるとを昔日に禁せしならん、今日の宗派は世に出めるとあかりしな、故へお政府にして干渉の精神を有せぬ則ち之れと禁止するも固より怪しむ足らずと雖も若し不干渉の主義を執るとせぬ宗派の分合は其自爲に任するの外なかるへし日本政府の尙未だ干渉を宗教に絶たざるものなる歟夫の既廢の教導職身分取扱ひは在職の時の等級に準すとあるか如きに至りては余輩頗る解する能はざるものあり是れ將して何の爲め自然かするや日本政府の尙未だ干渉を宗教上に絶たざるものなる歟抑も権力多きものは責任從つて重からざるへからず方今政府が政教一致の制を廢したる以上は兎も角日本宗教家の大は其支配の範圍を

廣く權力を加へたる者なり何となれは各宗各派其制規に由て其布教を自由にし政府の直管を離れたればあり即ち宗教獨立の位地を得たり隨つて其範圍と権力と廣且つ重さを加へたり嗟呼日本宗教家の毅然宗教家の面目を守りて一層社會を裨益するに力めずして可ならんや

第拾貳章 日本宗教と西教の比較

佛敎は東方宗教中の巨魁きうがいなど耶蘇敎は西方宗教中の巨魁きうがいなり此二宗の宗祖しゆしゆ其宗を開きしより一ハ幾んと一千九百年を經一ハ二千五六百年を經れとも一邦國の中に集まり活潑なる競争をなすの機會に乏しく一は専ら力を歐米二州に用ひ一は専ら東洋地方を横行せり然るに今や東西兩州の貿易日に開け万國一帶比隣の如く東西人民の交通恰かも親戚朋友の如くならんとし殊とと又近年耶蘇敎の日本に雜入せしと勢いきほひ甚はなはた少なからず將に其競争となすの機會を得んとするもの、如し余輩ハ日本宗教の前途を回想し之れを次章又論せんとするも當り先づ本章に於て既往の歴史に據り東西兩敎の其揆を一にする所以を

辨し以て次章を辨するの歩を作らんと欲するなり
蓋し余輩ハ佛敎と耶蘇敎とを以て共に其軌を一にすと説く所以のものは左の理由あるに基く

第一此兩敎ハ今日に至るまで其盛衰の軌を一とす

第二此兩敎ハ其平等主義を唱道す

今を距る三千餘年即ち耶蘇紀元前千八百年の頃に當り小亞細亞にアラハムある人あり此人や自ら天神の命令を受けたりと稱し其己れと同種類なるイスレール人種と支配せり然るにイスレール人種の目を重ぬるに従つて次第に繁殖し殆んど小亞細亞に充滿するに至れり此時に當て此人種の中ヌアイサツクセコーブ等の諸氏輩出し頻り

に天神を尊奉しイスレール人種をして一の信心を起さしめたり其後
 ちシヨ―セフなる人ありしか兄弟等の爲先に忌まれ遂は奴隸となり
 埃及は賣與せられ當時埃及國に於て尤も權威を有する貴族に奉仕せ
 り然るにシヨ―セフは天資英邁にして屢々奇功を奏したるを以て大
 又其貴族の爲めに愛敬せられ漸次に勢力を國中は振ふに至れり然る
 に當時小亞細亞に於て非常の飢饉起り人民爲め又其土に安んずる能
 はざるのまならず小亞細亞に在ての到底飢饉の防禦をなすを得ざる
 を以て許多のイスレール人の埃及に至りシヨ―セフは救助を乞ひた
 りシヨ―セフは其請願を許容し之れに糧食居宅を與へて埃及に居ら
 しむ其後ちイスレール人種は大に埃及國に繁殖せしか紀元前千五百

卅年比に至り此イスレール人の中にモセスと云ふもの出て其巴れど
 全族の人種が埃及王の爲めは非常の厭制と蒙むりイスレール人の職
 業とては全く奴隸婢僕の業にあらざるなく人類の受く可き幸福は殆
 んとイスレール人中は絶へたる在様を視て痛く之れを慨歎し遂はイ
 スレール人と率いて全國と出て小亞細亞と指して旅行せり然るに當
 時蒙昧にして各國との交通も從て稀薄ありしか故に流石のモセスも
 其進路を失ひ諸處に漂流し埃及より小亞細亞は達す迄の間に殆んど
 四拾年間の歳月を費せり而して其旅行中曾て亞刺比亞國のモントシ
 ナイと云ふ山に漂泊せしときモセスの天神より十戒の教を受けたり
 と云へり夫れより小亞細亞のシヨ―ンダル川を渡らんとするに當りモ

セスの俄に病を發して死去せり而して今日世上に傳ふる舊約全書の
 五卷の全くモセスが漂流中より起草せしものに係ると云ふモセスの死
 後に於てシヨスハなる人あり許多のイスラエル人と引率してシヨル
 ダン川を渡り小亞細亞のパレスティンに到り其土地の人民を征服し
 て其國を奪ひ我々は神明の特選に因て此國を支配するなりと唱へモ
 セスの十戒を基礎として専ら一の宗教を組成せり是れ則ち猶太教の
 起原なり

然れとも猶太教の主義とする所の止たイスラエル人の利益を圖り天
 帝はアブラハムの子孫にあらされの之れに利益を與へると云ふのみ
 ならず他の種族も向て却て暴戾を加ふるか如きの形状有るを以て自
 ら世上人類の嫉惡する所となり羅馬の盛んなるに及て全く之れが爲
 めに征服せられ非常に羅馬の厭抑暴制を蒙り宛かも前にパレスティ
 ンを亡はして其人民を厭制したる如き在様に至れり亦奇と謂ふべき
 あり

然るに此猶太教徒中より基督なる一個の豪傑を出し頻りに猶太教の
 偏屈賤陋ある主義を排撃し宗教の宜しく天下の人類を濟度とへし僅
 かに一種族と加護して一般人民を非難するか如きは眞成ある宗教に
 あらざること主張したり當時此基督を嫉惡せしは獨り偏狹固陋な
 る猶太教徒のとならば當時の執權者も大に之れを嫌忌し遂に羅馬政
 府の地方官は之れを捕へて獄に下し之を磔刑に處したり然れども其

宗教たる一種の人類と濟度とるか如きにあらずと公明正大に一般人衆と濟度とるの主義あるか故に門徒セントポール等の一度之れと羅馬に輸入するや天下靡然として之れに應し遂に今日の盛大と致とに至れり今や其基督教の種類を區別すれり曰く羅馬舊教曰く希臘教曰くアンチハザイン、グイン、宗曰くルウサー、新教曰くイヒス、ユバル、教等なり其他新舊共に尙許多の宗派有り今其門徒の數と擧ぐれり三億万人以上に及へり云ふ亦盛んなりと云ふ可し

是に由つて之れを見れり今日世界に在て其盛大を極むる基督教も亦其最初と遡て之れを観察すれり實に一個の猶太教に外ならざるあり然るも一の益其門徒を増加し一の愈々零落に陥るものり果して何故

そや則ち是れ一の社會多數人類の利益を計り一の限りある少數人類の利益を計るの二點に過ぎざるなり猶太耶蘇の二教に就てり略其一斑を序述せり余輩の之れより進んで婆羅門釋迦の二教に就き聊か其來歴を開陳せんと欲するなり

史家會て曰く太古の事邈として知るへからずと今や余輩の夫の婆羅門教の起源を記するも當り殆ど之れと全感なき能はざるなり然れども西史の傳ふる所に據れり印度は婆羅門教なる一種の宗門の起りし凡そ耶蘇紀元前千七八百年則ち今を距る三千六七百年前の頃も在りと云へり而して此年代に於てウベタ、メニウ等の教文成り其書の記載する所の教律論の三箇條として經に専ら勸善懲惡の主意を説き

律に五戒又の神前に禮拜する儀式等を記し論には難問駁議等の事情を載せたるもの、如し而して婆羅門教に三種の神ありブラマの神ハ万物と作りたる造物者なり其二ハビシニウの神にして之れはブラマの作爲せし万物を維持するの神也其三ハレハと云ふ神あり此神ハ破壊の神なり蓋しブラマハ万物創造の神にしてビシニウハ万物維持の神也而してレハハ其万物を破碎するの神あり然れども余輩ハ其説の如何ある處に起因し如何なる理由にして此の如く万物破碎の神と要せしか固より疑ひ知るべきにあらざるあり然れども婆羅門教の主義ハ實ハ偏狭賤陋の主義にして今日より之れを視れハ聞くも猶思ふべきものあり試み其一斑を記さん

婆羅門教の主義ハブラモン宗と稱する一種の人民を加護する宗教にして他の人種の決して之れを濟度せそと云ふ主義也殊に此の人種の中には僧侶士族商人土民と四個の階級を設け而して各級外のものハ宴席を同ふざるを禁し互に婚姻をなすと許さず若し之を犯すものあれば其犯罪の情狀ハ由て種々の刑罰と施し其罪の輕きハ之を追放に處し其罪の重きハ之に熱油を注ぎ或ハ目を抉り身を斬り又ハ手足と斫る等實に殘酷苛虐の刑罰と施せり而して此の如き處置に逢ふ者ハ獨り商民土民則ち農商を業とする平民社會に行ハれ僧侶士族に至てハ曾て其刑を受けざりき蓋し僧侶士族の輩の威權と擅にし他の二民を以て奴隸婢僕と爲し以て其暴虐の目的と達せんとするに出

つるのみ夫れ然り故に當時印度人民の多數は非常に暴戾を蒙り生
命財産は殘虐ある僧侶士族の爲めに掠奪せられ殆んど死地に陥らん
ととるの在様ありき

然るに耶蘇紀元前千六百年頃お至り此婆羅門教徒中より釋迦と云ふ
大豪傑起り四十年間終始一の如く諸處に遊説し殊に印度の北方に於
ての頗る其盡力と極めたり蓋し釋迦氏の佛道を講するや實に公平無
私よして三千世界の人類を濟度する目的なるか故に利の爲めに變せ
と威權を屈せと豪族に諛ひす正々堂々以て天理人道因果應報の大道
を主張したり當時蒙昧の世に當り釋迦氏の此新説を唱ふるの實に大
困難あり其最初社會の信用を得ざるや衣食の缺乏よ因りて飢寒の其

身を苦しむるのみならず或の愚蒙の人民の爲めよ思まれ或の婆羅門
僧教徒の爲めよ嫉まを其身を救ひ教を弘むるの苦楚ある果して如何
ろや實よ今日よ於て想像の及ぶ能はざるものあらん然れども其主義
たる公明正大にして能く社會人類一般の利益を計るの目的なるを以
て其門徒の漸次に増加し千百年を經過するよ從ひ印度の勿論亞刺比
亞や支那や西藏や安南や暹羅や朝鮮や將た日本や亞細亞全州殆んど
到る處として佛教を奉せざるのなし而して現に世界よ於て佛教を奉
するもの殆んど地球上人口三分の二お至れりと云ふ而して婆羅門教
の佛教の爲めに壓倒せられ其形跡たも留先ざるに至る亦憐れむべき
の至りあり

蓋し佛教の此の如く偉大なる勢力を逞ふするに至りし所以を推究すれば、其教旨の多數人類を濟度して以て一般人民の幸福利益を計畫するに在り而して婆羅門教の斯の如く衰頽に趣きしもの其一部分の人類を濟度して以て僅かに一部人類の利を計畫したるも外ならざるなり然則婆羅門教の衰頽して佛教の隆盛に赴きし所以の全く一の少數人間の利益を計畫したると一の普く多數人民の利益を計畫したるに過ぎざるなり余輩の既往の歴史に據り宗教の盛衰を考せし事跡を観察すれば實は東西其軌を一にする如きの感情なき能はず何とされん曩きに耶蘇基督の淵源を穿鑿せし其源の則ち猶太教に發して而して其猶太教の衰頽して耶蘇教大に其盛大を致せしを發見し今や

佛教の來歴を尋ねて佛教の其根元を婆羅門教に發して而して婆羅門は零落して佛教の繁盛を致せしを發見したればなり噫是れ均しく宗教也而して基督教佛教の如きの日々益々其門徒を増加して其勢力を逞ふするに至るに拘はらず婆羅門猶太の如きの甚しき衰頽を極め今將よ其形影たも視ざるに至らんとす何ぞ夫の盛衰の相反する此くの如きに至るや余輩身を宗教に委たる者にあらずと雖ども此猶太教徒、婆羅門教徒の爲めに痛惜せざるを得ざるあり

何をか西教が平等主義を執ると云ふ曰く天道に登るの道は貴賤の區別なしとい彼教徒の信奉する確言ありと聞けり試み彼徒の詠く所を擧ぐれば曰く人は上帝に對して同權同等あり曰く人は上帝の外に

の眞に支配せらるゝものよめらす曰く眞に吾人の仕奉るべきものは
 止た上帝のま曰く上帝よめらざる人よ支配せらるゝの一時餘義無く
 せらるゝのみと深く人間平等説を講し一切の人類を濟度す可きまを
 を述へ之れを唱道して以て天の才を人に賦與する愛憎厚薄の別なき
 まとを示せり是を以て後世の政治家の彼の法律の眼前に貴賤ありし
 と云へる政治上の確言の天道よ登るの道に貴賤の別なしと云へる
 政治上の確言に胚胎せしものなりと説をあすことあり此説當を得た
 るや否やを知らされども鬼も角も基督教か平等主義を執ることは疑
 ぶ可からざるの事實とす古へより歐洲宗教家も往々英傑を生し姓名
 を竹帛に垂るゝ者あり歐洲各國か宗教家に往々有名ある政治家を生

したる所以の當時世の有爲の士政治世界にては門閥等級の爲めに制
 せられて職足を伸ぶるに由しなけれは平等主義の行ゆるゝ宗門部内
 に入り宗徒として王侯大人に接遇し以て職足を伸ぶるの機会を求め
 たるにあらざるなきを得んや之れを戦争に例ふるに政治部面即ち俗
 世界の大手なり宗教世界即ち出俗世界の擲手なり當時の英傑大手の
 門閥關門堅くして破るへからず如かす擲手より敵の不意を衝かんに
 いと才を懷て身鄙賤なるもの争ふて宗門に入り以て平等主義を冥々
 の中お社會に種植し以て今日を致したりと云ふて不可あかる可し
 之れを別言すれは門閥主義と平等主義の千百年間歐洲諸邦を戰場と
 して戦争し門閥主義終つて敗走潰散したるものと云ふ可し而して平等

主義に此勝利を得るの手段を興へたるもの、基督教の功多きに居れ
 る基督教も亦平等主義の忠臣と云ふて不可なき歟
 何ぞか佛教か平等主義を取ると云ふ曰く四河海に入れの同鹹味との
 彼宗教徒の確奉する確言也と聞けり蓋し此四河と云僧侶士族商人土
 民を譬喩するものにして釋氏の意思へらく印度の俗世界を以てせり
 此四族あり此四族の溝渠深くして互ひに交際を許さざればと出世間
 即ち僧世界ありての豈僧侶あらん乎豈武族あらんや皆平等法界中
 に逍遙する衆生のと其狀恰かも四河各流れを異にすと雖ども一旦大
 海に入るに及びての同一の潮水のと同一の鹹水のと云ふの意なら
 ん彼の釋氏王家に生れ人間の富貴を極むるを得るの身分にして而か

も門閥主義の盛んある時勢に際し勇進猛行願する所なく直ちも平等
 主義を以て立教の本意となし其眼中僧侶なく又門閥なきか如し其勇
 氣や恐くの世界に一二を争ふものあるへし今其説の大要を擧ぐれば
 即ち曰く人間の天賦に貴賤の區別ある者あり故に人類の必らず全等
 に利益を受けざるへからざるなり去れこのころ人類の権利の平等に定
 らざるへからず然るに婆羅門教の如き人類社會に人為の階級を立
 て自然に人間か受く可き幸福を侵掠して己れ僧侶等の利益を計るの
 決して佛の人に對する主意にあらざるあり故に人の佛の前より於て貴
 賤の差別なし宗教の本旨何ぞ婆羅門の如き專制殘酷のものならんや
 と宗祖立教の主義斯の如し是を以て腐敗の僧に乏しかる後世と

雖ども未だ一人の第二の世界に貴族平民の別あることを説くものも
 ならず又第二の世界の往還に貴賤の別あることを説くものもならず是れ
 全く宗祖釋氏か平等主義を以て立教の骨子としたるよ由るあならず
 や今日の日本の僧侶は古の僧侶も及りず今の宗教の信仰の古の宗教
 信仰に及りず今の僧徒多くの宗祖の平等主義を擴張して冥々の中よ
 日本の治化を助くるまどをなさゝるの勿論其甚たしき往々宗教部
 内の組織を政府の有職者は補綴せしむるの醜態あり是を以て元來宗
 教信仰に冷淡なる日本人民をして一層信仰を薄くせしむるのみとな
 きあならずされとも其宗祖の教の之れを利用せし治化を助くるの能な
 きにあらず故に曰く西教佛教宗祖を嫌よし崇式を異よし雖ども平

等主義を取るの一點に至りては彼是殊なる所を見ずと
 以上陳述する所は則ち佛教と西教とが其操を一はする所以を比較せ
 しものなり之れ蓋し日本宗教の性質として明瞭ならしむるが爲め
 掲げたるの章として後章日本宗教の前途及び維持策を講ずるの歩を
 なせしに過ぎざるなりきよ之れより進を進んで漸次本論の主旨も及
 はん

第拾三章 日本宗教の前途

苟くも方今夫の泰西耶蘇教國の思想如何を知る人の其人智大に進んで宗教の危急將に頭上に落とんとするの事實を庇蔭する能はざるへし眼以て之れを視れハ爾淡たる妖雲ハ四天に滿布し耳以て之れを聽けハ颯拂たる暴風地塵を捲き來らんとするの狀あり日耳曼にハ國民黨ありて將に法王權に抗せんとするの勢ひあり佛蘭西にハ改進黨の守衛家に對して激抗する後り爲めに同國の外に對する威權ハ殆ど將ハ地を拂ふに至らんとす以太利に於てハ羅馬政府ハ破宗帝王の存に飯し大教主の故さらば虜囚の身たるの狀をなして以太利王の罪惡を鳴らし自己の庇ふへからざる過失多きか中に尙爾然として法王無過失

の説を主張せり舊教の首牧師某曰今歐西全社會の風潮ハ將ハ耶蘇教と出去らんとするの傾きありと此言や實は其眞を寫せり又米英兩國の宗教家の宗教信心の基礎ハ今世の新智の爲めに撲滅せられんとするの在様ありと心配し百方盡力して其將ハ來らんとするの危難を避けんとするもの如し凡そ社會の經過す可き變遷中に於て其尤ハ劇烈あるものハ宗教壓抑の代價之れなり希臘兩史を繙きて之れを看るに其危險實は言ふべからざるありや然れども遂に宗教ハ永久保續することを得ず大智漸く發達するに従つて亦其面目を變更するに至れり見よ世界万国の中上と耶蘇誕生の比よ々して下も今日に至るまで尙依然同宗教を尊

崇するもの果して何國ありや陸平我日本宗教の運命亦蓋し斯くの如
 きものあり余輩熟々日本宗教衰頹の原因を観察するに實は日本宗教
 の其宗旨曖昧にして僧侶姦佞加之弘教の方法具備せざるを以て其衰
 頹の原因を所造せり今にして之れが改革を施さざるに於ては到底西
 教に對立して其勢力を維持する能はざるべきや明矣蓋し宗教の盛衰
 の其係るとまろ概ね人為に在り決して天然に出づるにあらざる是の故
 に宗教の度にして人智の度より高きとき其勢力強大あるべしと雖
 ども人智漸く進んで之れと同等なるに至れば其勢力全く地も落ゆる
 ものなりとす凡そ人智の程度を分ちて第一實理を信する者第二空理
 を信する者との二種を分ちて人智尙未だ空理を信するの場合に在つて

の宗教は未だ全勢力を落さざるの時なりと雖ども人智漸く進んで實
 理を信するの場合に至てや夫の漠然たる宗教の容易に勢力を占むる
 こと能はざるものとす其詳細の理由の始く之れを後章に譲り余輩の
 先の本章は於て日本宗教の前途を豫測せん然れとも之れを爲すに先
 たち我宗教歴史の一斑を示さざるべからず
 史は稱を欽明天皇即位の十三年に方り百濟より佛像及び經文を獻し
 上表して曰く是の法諸法中に於て尤も殊勝となす之れを我邦は佛
 法を輸入する始めとす其後ち佛教を講究するもの續々相接して宗徒
 頗る増加したり崇峻推古の朝に至れば多く堂塔を興し廣く寺院を造
 り諸宗漸傳し衆教並ひ起り反正聖武の朝に至れば佛教の勢力最も昌

盛を極光たり然るに其後ま至り僧侶は漸く其本分を越へ國事兵事に
 干渉するの弊害を生出したるを以て源平の亂起るに及び南都の巨剎
 の清盛の爲めは焚かれまして比叡山も亦信長の狂炎に委せり蓋し清
 盛信長が寺院に向て此の如き暴行を加へし僧徒等が其職分を忘れ
 戒を破り兵を貯へ社會の擾亂に關係したるの結果ならん必竟するも
 此災害ば僧侶等の自から招きしものと謂ふ可きなり徳川氏の世に至
 り一方に於ては大に僧侶を檢束して敢て亂暴を働く能はさらしめ一
 方に於ては大に之れを保護して其教旨を擴充するを得せしめたるを
 以て其三百年間に於ては佛教の殆んど全國に瀰漫せり然るに一朝維
 新の改革に遭遇し舊來の寺領たる朱印地の如きも悉く上地を命せら

れしのみならず神佛分離の處分も由つては重大の影響を寺院に及ぼ
 したるを以て昨日まで緇衣を着せし僧徒は俄に髮を落へて俗人と伍
 をなすに至たり一時末法の在様現出せり未だ幾許ならず又社會自然
 の風潮に従ひ再び勢力を恢復し今日を以て之れを明治五六年頃に比
 すれば稍や衰運を挽回せし在様あれども其隆盛を見る能はざるは復
 た時運の如何ともする能はざるに出づる歟然れとも之れを要するに
 中古以來佛教の常に政府の庇蔭を受けて教旨を弘むるの在様あり今
 日に於て果して能く全く政治と分離し自ら獨立して剛毅の志を興さ
 り外面の盛衰に係はらず却て教法の眞面目を盡くし多數人民を濟度
 するの方便となる可し況んや重大の勢力ある基督教と競争をあすの

今日に於て徒らに舊株を固守して其目的を達するふとを望むへけんや

願みて我邦に基督教の傳來せし年代を考ふるは太だ詳明ならず史に稱せ元和十四年十月小西の餘黨耶蘇教を以て人民を煽動し肥前島原に據り亂を作す徳川家光令を西海の諸侯より下し兵を出たして之れを討せしめ板倉重昌を以て軍を監す十五年正月朔重昌戦死す松平信綱之れに代り遂に城を陷るれ賊の渠魁十餘人を誅し老少男女死に就く者四万人の多きに上ほりしが是れより海内を命して益々嚴に耶蘇教を禁止せりと然らば耶蘇教の我邦に傳播せしめ晚くも元龜天正の頃に在りしと假定するも敢て空談にあらざる可し何とあれの耶蘇教

よして若し此時代の後ちに傳來せしものなれば何る俄かよ此くの如き衆多なる信者の一致して其宗旨を奉ずるを見るへけんや去れの耶蘇教の我邦に傳來せし佛敎に比それの殆んど千五六百年の后ちに在りしならん島原の亂平定以來の徳川氏種々の手段を設け熱心して之れを排擠せしを以て耶蘇教の全く中絶となり殆んど其教の痕跡たも止めざるに至れり然れとも港門一開して信向の自由となりしより其教の再び漸次に内地に浸入し佛敎師を派出し説敎所を設立し三府を始め東山西海に至るまで許多の宗徒を現出するに至る何ぞ其流傳の甚だ迅速なるや

已往を推して未來を察するに此二教の后来必らず相競争して一盛一

衰をなさゝるへからず耶蘇果して多數の信用を得んか佛教の必そ衰
 頽せん佛教若し勢力を博取せん歟耶蘇教は必ず廢替せん凡ろ何れの
 邦國も於ても二宗教の相拮抗して與に勢力を維持するものあらん夫
 の猶太教婆羅門教の基督教佛教の爲めに排斥せられて衰廢に就きし
 事跡に付て之れを視る可きなり今や基督教と佛教の同時も我國に對
 立せる以上の其全勝を得るもの果して孰れの教門に在る歟未だ輒
 く之れを今日に明言する能はざるなり余輩か前章に於て佛教西教の
 比較をなすに當り臚列したる所の例証を徵するに我邦僧侶の耶蘇教
 に於ける稍や夫の婆羅門の佛教も於けると同一の形跡あるかの疑ひ
 なき能はざる然則此二教の一勝一敗を蓋し今日も豫知するに難からざ
 るなり

基督教の再び我邦に傳來するや日たる尙淺く而して歐米より來れる
 傳教師の如きハ普通人民に向つて言語の不通あるのみならず内地を
 旅行するに至ても極めて便利を欲くの在様あり然れとも其教法の漸
 次に諸方へ廣まり數千年の久しき民心を支配したる佛教と對立を爲
 すの勢ひあり何ろ其流傳の迅速なるや蓋し基督教徒眼中より貧富
 なきあり貴賤なきあり官吏と人民の差別なきなり社會一部分の勢力
 あるものも依頼して其教法を布かんとするか如き卑劣の方便を執る
 ことなく平等一様に多數の人民を濟度せんことを熱心す之れ基督教
 徒の信用を今日に博取し殆んど佛教を壓倒せんとするの在様を現出

せし所以なり蓋し佛教の如きも釋迦の目的とする所の山河川木悉皆成佛^{ぶつ}あり法^{ほふ}の爲^{ため}めに身命^{みんめい}を惜^{おぼ}しまず設^{たて}令^{たま}ひ熱^{あつ}鉄^{てつ}猛^{まう}火^かの地^ちを踏^ふむも以て患^{うれ}とせそ其公平^{こうへい}卓越^{とくやく}なる數千年の久しきと歴^へて幾億^{いくおく}万^{まん}の人心^{にんしん}を支配^{しはい}し勢力^{ちから}を地球^{ちゆうきう}上^{じやう}に振^おぬもの決^{けつ}して偶然^{ぐぜん}にあらざるなり然れとも今日我邦の僧徒の多數の如きり全く教祖^{きやうそ}の意思^{いし}に背^へ違^いし社會少數の人に依^い頼^{らい}して教法^{きやうほふ}を維持^いせんと欲^ほする形迹^{けいせき}あり夫れ此くの如くおして能^たく多數^{たすう}の信用^{しんよう}を來^きたすを得^えへさか夫れ斯の如くにして耶蘇教^{やそ}と競争^{けいさう}して失敗^{しぱい}を致^{いた}さるるを望^{のぞ}む可^べき歟蓋^{おほ}し往古^{わうこ}佛法の我邦に弘^{ひろ}まるや専ら君相^{きんさう}の誘導^{ゆうどう}に出^いて宗教の専ら國法に依^い頼^{らい}するかことき在^あり様なりき降^{くだ}りて徳川氏の時に及^{およ}ぶも僧徒の

常に王公貴人の門^{かど}に出入^{しゆつにん}し之れか勢力に因^よりて俗人の信用を増^ま加^せするものなきにあらず因習^{いんじゆ}の久しき今日に至^{いた}りても其弊害^{へいがい}の全く洗^{せん}除^{じよ}せざる所^{ところ}あると見る也視^みよ數年以前に在^あつての圓顛^{えんてん}黒衣^{くわい}の出家^{しゆつが}を以て教導職^{きやうどうしやく}の名^なを冒^{をか}し教正^{きやうせい}講義^{きやうぎ}の職位^{しやくい}を政府^{せいふ}に受^うけ己れか教旨^{きやうし}を説^{せつ}法^{ぽふ}するに當^{あた}り併^あせて政府の主意^{しゆい}を人民^{じんみん}に告^こ示^しするの責任^{せきにん}を有^あせしにあらすや之れ果して教法の眞面目^{しんめんめい}なりと謂^いふ可^べきか殊^{こと}に驚^{おど}ろくへさの或る僧徒の地方を雲遊^{うんゆう}するや地方官に依^い頼^{らい}し布達^{ふたつ}を出^だたし人民をして其説法^{せつぽふ}を聽^きき其教會^{きやうかい}に入ることを告諭^{こくゆ}するあるに至^{いた}れり蓋し僧侶の謂^いへらく政府及び官吏^{くわんし}の社會に向^{むか}ふて重大^{じゆうだい}の勢力を有^あするものあり此勢力あるものを己れの後^{あと}ろ楯^{たて}とし以て弘^{ひろ}法の援助^{えんじゆ}とせし必^{かな}ら

す偉大の勢力を社會に博するに至らんと是れ亦一時の方便を得たる者ならん然れども凡そ我れより他に依頼せし亦從つて他の願使を受けざるを得ず之れ自然の勢ひなり故に僧侶をして官吏に依頼し其力を藉つて佛教の助けとなさしむれり官吏も亦僧侶を厭托して其便利法を説き自家の辨護を依頼するに至る可し是れ必らず直接間接に於て決して避くべからざるものと然らば若し今日の僧侶にして官吏の力を藉つて佛教の弘布を奔走するものあらば即ち世人の評して曰んばとす日本の僧侶の圓顛黒衣として官吏を兼ねるものなりと夫れ斯の如くせし能く多數の人民をして深く其教義を信せしむるを得べき歟蓋し單に理論上より之れを視れば政府の利益の人民の利益にして

政府と人民との終始相待て相離るべからざるものあれば實際の上も於ての或る然る能はず何となれば法律の如き多く一時の弊害を匡濟する爲め設くるものあるに由り爲政家か認めて必要とあらず所に於て却て小民の之れを嫌悪する場合なきあらず故に教法家か全く政府と聯合を爲し官吏の主意を説明し法律の効能を講述する責任を負ふに至れば政治社會に生出する風潮の盡く教法上に波及するに因り其庇護する所の僅かに一部分の人お止まり多數の信用を得るを望むべからず之れ豈に教法の勢力を永遠に維持するの道を得るものならんや

願みて今日耶蘇教の我邦に在るものを觀察すれば其勢力衰々乎とし

て日よ増進の傾向あり而して其教會の如何して之を築造せし歟政府の威力を籍らそ其傳法師の如何して説法する歟毫も官吏の手傳ひを受けざるなり政府の威權を籍らす官吏の手傳ひと受けす且つ其教法を弘むるに於て種々の艱難あるにも拘りらす漸次勢力の盛大に赴くもの敢て一方に依頼すること無く全く政治社會に離れて自から獨立を爲し普く社會の人類を濟度せんとする其目的を失はざるよ由れり今日の在様を以て之れを考ふるに佛教は果して能く耶蘇教を排擠して全勝と收むるを望む可きか余輩之れを信する能はざるなり佛教自ら因果の理を説て曰く凡そ増上果は其一世を感して異熟せしむるものされり一旦其果の盡くるとき人の心俄然と變し嚮きの威靈

の今日の笑柄とあり其珍重せし所の事物の全く乾屎楪と殊ならず誠に以て不思議と云ふ可し夫の平氏の繁榮ある時に當りては平氏にあらされり人に移らすと云ふるに至れり之れ増上果の時にして平氏滅亡の期あり徳川氏の末世の如きも殆んど無情の卯木まで其威徳に感し公義の二字の天下の人心を威伏するに足れり其果報の盡きて滅亡するときは恰かも青天白日の忽ち雲雨を起し迅雷疾風相乘するに異あらず其變化の倏忽の中に在り古昔邦國の盛衰興廢するも亦皆此理にして其時と處との因縁の各々殊ありと雖ども此因果の數を免かるゝもの決して有ることなし嘗よ邦國のとあらず一家一族若しくは一人の上み於ても自ら此理に準ずるものと知る可きありと(佛道本論)

然れの佛教の如きも古昔王政の世に隨緣異熟せる結果より等流し來り武門專政の世に増上果を結ひ今日正に滅亡の時運に至れりと謂ふ可し

然則我國宗教の前途の蓋し其自然に放擲すへきか將た之れか前途を滅亡に維保するの道なき乎乞ふ次章に於て詳かに我邦の盛衰の原因を探究し其前途を滅亡に維保するの方策を案出し本編の主意たる日本宗教改革の事を論定し以て本論の局を結ぶ可し蓋し我邦宗教の前途の之れを其自然に放任すへからざるの理由あれなり

第拾四章 日本宗教維持法(其一)

論説の歩武漸く進んで已に日本宗教の維持法を講ずるの時に際しぬ蓋し前章に於て論述せしか如く日本宗教の前途として危儉あらしめたる所以即ち日本宗教をして衰運に向はしめたる原因の左の三事情に在りとす

第一 宗教が社會の進歩を伴ふて進歩せざる事

第二 僧侶が無學にして且つ姦佞ある事

第三 弘教の方法具備せざる事

抑も宗教の其源を野蠻の時に發するものにして一世の俊傑能く其の時代を制するに足る可きものあり其教義を宣布して始めて之れを存

立するあり而かるに後世亦其時代を制すへき人物續々輩出し常に宗
 教を進歩せしめて社會の進度よりも一層高度を置かざる可からず若
 し然らずして社會の進歩と共に宗教の進歩を見ず僧侶中み俊傑を出
 たさず社會人民の智力の進歩して止まざるに宗教の依然舊位に在ら
 んにの宗教の固より衰頽せざるを得ず况んや宗教の其舊位よりも退
 いて遠く昔日に及ばざるに當り社會人民の智力の大に昔日より進歩
 して遠く昔日の上に出てたらんにの宗教の勢力遂に地に墜つるの即
 ち當然のことなるをや

佛教者今日宗教の勢力衰へたるを歎し勸もすれの單に政治上の干渉
 より此に至れるを言ふものあり思はざるの甚しきなり勿論干渉を政
 府に受くるに於ての宗教の衰運を招くこと免かるへか少ざるの道理
 なりと雖とも必竟するも日本宗教の衰凋を來たせしは宗教其もの、
 罪亦無之と謂ふへからざるもの有り惟ふに今日佛教の衰凋を表せる
 の則ち右に陳ふるか如く其社會の進歩を伴ふ能はざりしに由れり其
 社會の進歩に伴ふ能はざりしは則ち佛教徒の無學にして社會の形勢
 を知る能はざりしに由れり而して佛教徒の懶眠遂に能く弘教の方法
 を整へざりしよ由れり嗚呼十餘年間社會の長足の進歩をなしたり而
 して佛教の長足の退歩をなしたり試みに見よ今日僧侶又俊傑を出た
 せるまど昔日の如くなる乎信徒の資力を給すること昔日の如くなる
 乎此れ皆舊時に及ばざるなり而して世の僧侶とありて宣教の責に任

するものゝ多くの飽煖の計を求むるものよして道徳知識を以て教義を弘めんとするものゝ甚だ稀れなり之れを要するに佛教のみにて昔日より衰退して而して社會の大に進歩したり知る可し佛教のみにて遙かに社會よりも降下したるを昔時宗教の隆盛にして社會の上にあらずら猶は彼れか如し今や智力の發達盛んなるに當り昔時に及ばざるの教法を以て社會を加へんとするの猶は弓矢を持するの兵卒を以て精練の銃隊と戰ふか如し其成績豫かしめ知る可きのと嗚呼佛教維持の困難蓋し斯の如きものあり我邦の佛教家今にして奮すんは佛教の滅亡の蓋し遠きを俟たざるへし

茲に余輩か日本宗教の維持法と做す所のもの則ち前段述ぶる所の宗教衰頹の原因に相對するものにして左の如し

- 第一 宗旨に幾分の改良を施す可し
- 第二 教法家の懶眠を醒まし剛毅の氣象を養成するを要す
- 第三 普く布教の盡力す可し

蓋し前も陳へし如く宗教にして社會の進歩に伴はされに到底其隆盛を期すへからざるあり吾邦維新以來百事文物の進歩の果して幾何るや而るに我佛教の依然停滯して進歩を見ず其説く所尙奇跡怪事お止まり試みに宗教家の説く所を聞けの唯古來より教法家に傳はるの口碑を擧げて其宗旨を主張し而其果して今日の人民に適するや否やを問はず徒らに方便空想の主義を維持し人をして日本宗教の本旨の

甚だ曖昧なりとの歎を發せしむるに至る者多し之れ實に日本宗教の改良せざるへからざるの點あり釋氏か定先られたる所の佛道の本旨の敢て曖昧のものにわらす因襲の久しき遂も方今の如き曖昧たる宗旨の現存を見るに至れり蓋し未開野蠻の社會も在りての如此宗門も亦勢力を得ることなきにあらざるへしと雖ども斯くての日本今日の社會も勢力を振ふまど能はざる可きあり今夫れ佛教と耶蘇教とを比較するに佛の高妙にして耶の卑近也と云へり然れども耶のフヒロソフ非一即ち哲學を以て大に潤飾を加へたるに由り能く時世に合適するの姿有り宗教家にして苟くも宗教を重視せし宜しく之れを哲學風に變すへきなり熟々古の宗書を視るに其卓絶なること後人の

得て企及すへからざるものあり若し宗教家にして之れを折衷し以て宗教を弘布せば其振興蓋し見る可きものあらん宗教家にして果して宗教の哲理上より論するも又方便上より論するも容易あらざる宗教たることを知りなり日本今日の宗教を改めて社會の進歩も適合したる宗教となすことの甚だ難からざるを發見すへし之れを是れ余輩が所謂日本宗教維持策の第一要點となす

我邦今日の僧侶の率ね皆も姦佞あり邪智なり徒も私利を營むに汲々して全く教祖の意思に背達し社會少數の人に依頼して其私慾を逞くせんと欲するの形跡あり試みに寺僧か諸民に對する關係を見よ其諸民の爲先に謀る所は毫も之れあらずして只所謂葬祭の關涉を名とし

て貪婪厭くことを知らす恰かも専制暴虐の政府と人民の關係の如く
 動もすれの強迫して金錢物品を寄納せしむるか如きの徒あり其宗教
 の何物たるを知らず宗門の爲めに力を盡すへきまどを覺らす徒に方
 便説を主張して以て愚民を惑ひし宗教を以て飽食煖衣の機械と傲す
 もの比々皆之れなり蓋し釋氏の目的とする所い山河草木悉皆成佛よ
 在り法の爲めにい身命も惜しまず設令い熱鐵猛火の地を蹈むも以て
 患とあさす只其公平卓越ある旨趣を主張するものよあらずや然るに
 我邦現時の僧輩は斯の如き事を以て世よ處せんぞ嗚呼豈何すれろ
 斯の如くにして宗教の隆盛を望むへけんや其滅亡せざるものい僥倖
 なり是の故に我宗教を將に亡ひんとするに維持して其隆盛を望まん

とするや必ずしも僧侶の現状を改良し之れとして學理を心得しめ之
 れをして貪婪に陥らしめす力を宗教に盡さるへからざる所以を悟
 らしめ由來する所の姦佞邪智を一掃するよあらざるよりの到底能い
 さるへきあり日本宗教の腐敗を救ふい佛教徒の腐敗を救ふに在り日
 本宗教の隆盛を致たすい日本僧侶の現状を絶つにあり西哲曰く宗教
 か勢力を得ると得ざるどの其宗旨の良否よりの率る傳教者の良否に
 在りと蓋し宗旨にして如何に美を裝ふと雖ども傳教者其人を得ざる
 に於てい到底宗教の隆盛庶幾とへからざるものあるあり是れを之れ
 余輩か所謂日本宗教維持策の第二要點なりとす
 余輩か取つて以て日本宗教維持策の第三點とする所い則ち弘教に盡

力すへしとの事あり、爾々當時教法の狀態を見るに、耶蘇教の我佛敎の
 寝蓑に乘し西に北に競起し、勉勵して濟度を事とす而して我佛徒に在
 つての日中一食樹下一宿の頭陀上行を忘れ、徒らに一寺一山の維持に
 奔走し、諸種の煩惱よ心形を苦役せられ、爲めに口能く佛乘を説くも心
 の已に在家吾人と殊なることなし、之れを憶測せし寺中の安居するの
 途を得れ、復た他に求むる所なきか如し、何ろ無爲果を証して衆生を
 救ふに遑まらんや、内以て誘化を盛んにし、力能く西教に抗敵し、外以
 て教旨を擴張し、以て佛恩に報ひ、法の爲先に拮据計營して、ある始めて
 佛敎の隆盛を望むへけれ、蓋し余輩か弘敎に盡力を可しと云ふ所以の
 もの、徒らに一寺一山の維持を奔走せずして、力を一般宗門の維持に

盡し、普く教旨を擴張して、專念濟度に従事せよと云ふ、在るなり、徒ら
 に字句を摘て、經論に執着し、諸種の煩惱よ心形を苦役せらるゝか如き
 に於て、豈曷すれそ佛敎の隆盛を望むへけんや
 眞理無二、帝道惟一、敷教之門雖異、覆載之功乃同、故術護萬邦、唯可資於佛
 陀弘隆三寶、又夫沙門釋子、三界旅人、離家離鄉、無親無族、或坐山林而求道
 或蔭松柏而思禪、雖有避世出塵之操、不忘護國利人之行、而糧粒宰得、飢餓
 常切矣、佛亦曰く、辭親出家、誠心達本、解無爲法、名曰沙門、と蓋し、一私事
 齷齪して、而誘化を盛んにせされ、宗教の隆盛到底期すへからざるも
 のあるなり、教旨を擴張して、誘化を盛んふす、是れを之れ日本宗敎維持
 法の第三要點なりとす

以上述ふる所の則ち余輩か日本宗教の維持策と倣す所のものあり之れを詳細に論ずれの維持策固より他に是れあるへしと雖とも要するに以上の三點は日本宗教維持に尤も大ある關係を有するものならんと信す是れ余輩か本章を草する所以なり乞ふ更一步を進め次章に於て余輩か佛教維持策の極意を吐露する所あらん

第拾五章 日本宗教維持策其二

激旨に幾分の改良を加ふ可し教法家の懶眠を醒す可し普く布教し盡力す可しとの余輩か日本宗教の維持法として主張する所なり其大體の理論の既に前章に論辨せしか故も今や進んで之れか維持法の極意を辨せんと欲す蓋し惟ふ前陳の維持策を講する最大要點の佛教上一箇の典命を確定するに在りと夫れ事の起るの全く偶然に出づるのみならず物の盛んなるの決して偶然に成るのみならず根本あつて而事起り基礎具のゆて而物盛んなり土臺定まらずして事物か完全の域に進むの謂われあらざるあり基督教か勢力を天下に得たるの夫のバイブルと云へる一個の定本あるか故へならずや基礎をバイブルに取り教宗

をハイプル又取りハイプルを典命となしハイプルを宗旨と做し斯の一定の基本に由つて勢力を天下又得たるの基督教の基督教たる所以なり苟くも然らざらん歟今日の勢力を得るの基督教の望むへからざる所あらんとす試み思へ一定の土臺あく支離分裂して事を謀り而かも纏まりたる充分の結果を得るを望むへき乎甲の東の方角を稱し乙の西の方角を唱へ南に丙向ひ北に丁向ふか如きは於て甲乙互ひに孤立の勢ひをきし丙丁互ひに背馳の状を呈し宗旨混亂其版看する所を知らざるに至り結局完全ある屹立を見る能はざるの必然なり是を以て宗教に一個の典命を立て甲も乙も丙も丁も宗旨を擴充するに須らく斯の典命に依るべきの制度を設け一個の宗教中幾等の分派あり

るも皆此典命を基ひて教宗を弘むべきの規律を定むるときは宗旨混亂の憂ひなく甲乙背馳の恐れあらず一致和合完全なる宗教の隆起を得るの余輩の信して疑はざる所なり然かるも我佛教の在様を考察するに斯の一定の基本あらざるの亦悲しむべきのこととあらずや一個の教宗にてありきから多數の分派が主張するところの悉く背馳の勢ひを示し甲乙を思ひ丙丁を疎んずるの状あるの目今疑ひを容れざるの事實あり是の故に宗派は由りて大に其主張するところと殊にし一致和合の望むへからざるの勿論漸く軋抗敵の状を呈し獨立して圖る所あるの好けれども之れが爲め佛教其もの宗旨を曖昧的に變し内外の人をして佛教真正の宗旨が果して何れに土臺するものか

るやを知るに苦しましむるの大に佛教其もの爲先取るへからざる所あり將た佛教家其もの爲めにも余輩の取らざるところなり佛教を盛んならし先んと欲せし佛教其もの宗旨を明らかにせざるへからず佛法其法の極意を示さるへからず社會おして佛教の宗旨を知らず世人にして佛法の極意を悟らざるに於ては佛教の勢力いかてか盛んなるを望む可きぞ碩學ミル氏曾て宗教を論して曰く輿論を助せられざるべき宗教の勢力大なるを期すへからずと眞ある哉言や宗教よして社會の信仰なく世人の信仰なきに於ては其隆盛の望むへからざるは必然ありミル氏の所謂輿論の幫助とい即ち社會の信仰は外ならざるなり換言すれば宗教にして社會の信仰なくんは其衰頽

するの必然の勢なりと云ふの意あらん然り而して斯の信仰ある者の偶然に起るものにあらす其理由在つて始めて起るものなるを知らん若し宗教の極意にして明らかならざるよ於ては信仰いかでか起るべきぞ若し信仰にして起らすんは宗教いかでか盛んなるへきを嗚呼宗教か一定の基本を有し確然たる典命を持するの必要是に於て乎明かあり宗教にして一定の根本を立て宗旨の極意を示し之れをして世上に明らかあらしむるよ於ては社會の信仰従つて起り其隆盛蓋し見る可きものあらんとす余故お曰く一定の經書に依り夫のハイブルに倣ふて以て佛教中一個の典命を立つるは佛教維持の爲め甚た必要なる事柄なりと余輩か佛教の上に唱ふる改良案の極意の蓋し爰に在つて

存ぞ教法家に望むる其懶眠を醒まし教旨の改良を行ふて以て布教に
 盡力す可しとの言を以てするの他あし斯の改良案の極意に基ひて精
 々圖るところあるへしと云ふの意あり此一事にして行われん歟教旨
 上の改良并ひに其弘教の方途の自から其得らるへきものたることを
 信す只夫れ然り此一事にして行われすんの間世間の信仰起らそ其隆盛
 の望むへからざるの必然ありと余の斷言せんと欲するあり言を換へ
 て之れを言ひ、宗教の本旨をして世上に明らかあらしむるの方途と
 求む可しと云ふこと之れあり嗚呼余輩か佛教改良案の極意の此一事
 に在り乞ふ一步を進めて之れを成すの方法如何を研究せん
 余輩の之れを成すの甚だ困難ならざるを信するものなり蓋し余輩か

所謂此改良案の要旨の佛教の土臺を一定し其教旨をして世上に明ら
 かならしむるに在るを以て則ち佛法中在來の一個の高尙ある經文を
 採り之れを以て佛法教旨の標準となし基礎となし之れを譯解して以
 て容易く世人より了解せしむるに在るあり從來の在様より由れば佛法中
 在來の經文の甚だ解し難きものにして一般世上の人への勿論教
 法家其ものと雖ども之れを解するも苦しむの状況なき能はず嗟呼夫
 れ斯くの如くにして焉くんそ世上の信仰を振起するを得んや其盛ん
 ならざるも亦勢ひの自然なり何となれの前も陳へし如く世上の信
 仰を振起するには先づ宗旨を明瞭あらしめざるへからず宗旨を明瞭
 ならし然んと欲せし先づ其標準を一定し世人をして解し易からしむ

るの必要あればあり是の故に一個の經文を採て之れを佛法の土産と定先たる上は充分に之れを譯解して容易に世人に了解せしめ宗旨の極意の果して斯くの如しと明言するの一事ころ之れ則ち余輩か所謂改良方法の要旨あれ之れを成すよ於ての左程の困難と見ざるなり嗚呼佛教を改良して之れを維持する方法之れを措て他に何事の存するを見る可き余輩か茲に本篇を草して佛法維持の方法を極論するの決して偶然に出づるにあらざるなり標準一定せの宗旨上の改良は自から成るものにあらす又教法家の不活潑も自から醫すへきの道あるにあらずや將た弘教の方法も自から整ぬものあるよあらすや余輩の教法家に望むに最大の奮發心を起し速に之れか改良を實行す可しと

の一事を以てするものなり今にして悟るとはろなくん日本宗教の衰頹の日を遡ふて増し到底之れか維持の方途を得ざるものあるに至らん教法家たるもの豈又戒しめざるへけんや

嗚呼日本宗教の國民信仰の自由を得たり律令關涉の羈絆を脱せり其本旨固より哲理に適ふ佛道本來の眞面目を見いして我邦三千七百万の人民を自由に化導し佛法東流の聖籤をして空からさらしむるの今日を措て將た何れの時をか待さん天意の極めて微あり故に諸才諸徳を一人に賦與し以て其心身に具備せしむることを得ざるもの、如く又衆善衆美を一國に賦與し以て其人種や教門や社會や政府や各々完全ならしむるよとを得ざるもの、如し是れ邦國に等差あり人民よ

優劣ある所以なり然りと雖ども人若し試みに各方の邦國に往きて各種の人民に交れり即ち其制度の良否を問ひす其文物の開否を論せず皆自か冥々の間に天理人道の行へるゝ有ることを知らん若し能く此天理人道の何物たるを解し其必らず服膺せべきものたることを知らん則ち到る處として四海兄弟の念宇内同胞の情自から其精神に感せざるの莫かるへし天理固より一國に私しせず人道固より一個人に偏せず日本宗教か勢力を得ると得ざるとの其宗徒の所爲如何か關す敢て天道の私する所に關せざるあり

日本宗教維持確論結尾

跋

一切衆生其根性大小等しからず佛の大慧能く之を看破し方便の智を以て方便の法を説く蓋し應病與藥は方便教中の大旨眼なり今夫れ文明の進歩は其速かなる飛丸の如き十九世紀の人民は十八世紀に人民に異なり明日は衆生豈に今日に衆生は同志からんや然らば則ち方便の法も亦た時世と共に推移せざる可からざるなり而して滔々たる釋門者流は昔日の方便を以て今日に説かんとす是れ所應に隨て説法を爲す者と云ふと得る可此れ如くよして佛教の隆昌を期するも決して得可からざる

也今日佛教は維持擴張を謀るや先づ文明人民は根性よ
應じて説法するを要す之を爲すよは僧侶自ら文明は思
想を養成するは外他は策なきなり頃日中山經國其著す
所の日本宗教維持確論を余は示し且つ余が跋を徴す余
其所論は甚だ我意と異ならざることを喜ひ則ち一言を
附して以て還す

明治丁亥一月中浣

浜村學人

宗教感言

門前の小僧と習はぬ經を誦むの譬の通を九春小僧
も久しく九春堂中より厄介と爲り居れば商ひの暇な
らば諸先生の談話を聴き少くは世世中の事も伺ひ
知るを得たり近比編輯局の先生たちの話を承るに
多く宗教は事より巨り又新聞紙上にも屢は宗教は事
を載せざるに小僧の少く了解も難きを別儀なら
ば世の人の筆は寫し口に論せる所大抵を神官が無
學なれば神宗振と小僧侶が腰抜けなれば佛教が衰
微し去るなりをどし誰れも彼れも只管は宗教家を

也今日佛教に維持擴張を謀るや先づ文明人民に根性
應じて説法するを要す之を爲すよは僧侶自ら文明に思
想を養成する此外他に策なきなり頃日中山經國其著す
所の日本宗教維持確論を余に示し且つ余が跋を徵す余
其所論に甚だ我意と異ならざることを喜び則ち一言を
附して以て還す

明治丁亥一月中浣

松村 學 人

宗教卮言

門前の小僧と習はぬ經を誦むの譬の通を九春小僧
も久しく九春堂中より厄介と爲り居れば商ひの暇な
どに諸先生の談話を聴き少しは世に中の事も伺ひ
知るを得たり近比編輯局の先生たちの話を承るに
多く宗教此事より亘り又新聞紙上にも屢は宗教此事
を載せを然るに小僧の少く了解し難きを別儀なら
せ世の人の筆に寫し口に論ずる所大抵を神官が無
學なれば神宗振をす僧侶の腰抜けなれば佛教が衰
微し赴くなりなど、誰れも彼れも只管に宗教家を

のみ責め立て、止まざるもの、如し如何にも神官
僧侶の落度も有るべく神官僧侶の奮發の足らざる
處も有るべしされと事物を一方のみを責めたてと
れんとて都合よく行くものにも非らざるべしと思
へば宗教なるものが果して社會に必用なり人世に
欠くべからざると定むる以上は獨り一方即ち宗教家
のみを責めぬ一方即ち信徒れ方よても相應の盡力
をなさざるべからざと思ふなり然からざれと到底
撞木を持たせして吊鐘の鳴らざるを責むると同様
なるべしと思ふ也近比中山整爾君宗教の維持論を

作て弊堂にて出版する事となれを九春小僧私かに
其草稿を一讀せるに如何にも宗教の要旨に當り益
宗教の忽がせよすべからざる事を悟まり之を讀む
宗教家諸君を定て慨然として奮起するに相違なき
るべし唯之れを讀む人民即ち俗に於ては如何なる
感想を起すべきや若し人民に於て共に奮起して宗
教家を助けんと欲するれば志を湧起すれば結構なり
と雖も唯之を以て宗教家れみを責めぬの具と思ひ
宗教は此通りに致すべしとて之を對岸に火事の如
く思ひて澄し込まば宗教の改良を到底覺束なかる

べもと思ふなり九春小僧一日店外に出で表を眺め
けるよ折しも一月此事なれば遠近に紙鳶を飛ばし
て遊び戯るゝもの多し是れにて思ひ當ることある
有りけれ例之は白紙を以て骨に張り紙鳶此形ちを
造たるも丁度世界に如きも此からん然れども骨に
白紙を張りたるれみにても紙鳶たるの用を爲さず
之に繪を畫き彩色を施して而もて后初めて紙鳶た
るを得べし然れば宗教の世界に於けるは丁度繪畫
彩色に紙鳶に於ける如く宗教は即ち世界の繪畫彩
色なきと云ふも不相應なる譬ひよは有らざるべし

夫れ既に世界と宗教ありて紙鳶も出來たりと雖も
扱て此の世界と云ふ紙鳶を揚げるには絲目と云ふ
ものなきべからず此絲目は譬へて見れば神官僧
侶即ち宗教家あるべし此宗教家に非常の英傑ある
は即ち絲目が少くとも紙鳶か揚るべしと雖も後世
此の如き人物稀れなれば即ち宗教の中よ色々宗
派が分き來りて世界の紙鳶を揚げることも丁度一本
絲目で紙鳶が揚らざ四本も八本も絲目をつけて揚
げると同様なるべし扱て是にて絲目も出來世界の
紙鳶は全く揚がる計りと成て居るも茲よ紙鳶の揚

絲と云ふれがなきは紙鳶は揚らざるなり其揚
 絲乃役は誰れぞと云ふに是れなん人民即ち信徒の
 役目なるべし然れば即ち今日に於て絲目たる宗教
 家を責むると同時に揚絲たる人民も盡力せざるべ
 ららざるとも九春小僧の私言にあらざるべしと信
 するなり知らせ世間の學者先生たちは生意氣の小
 僧と云つて退けるや否や

明治廿年一月

九春小僧記

明治十九年十一月十五日版權免許
 同二十年一月出版

定價金四十五錢

著述人

中山整爾

東京牛込區新小川町一丁目壹番地寄留

出版人

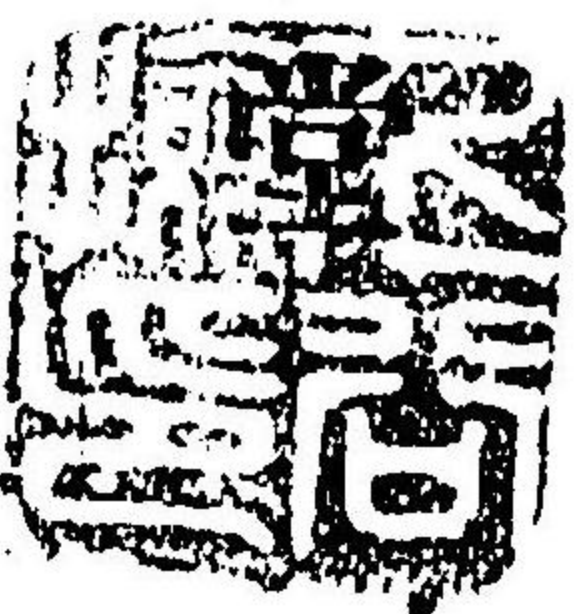
丸谷新八

東京京橋區三十間堀壹丁目五番地

發兌所

九春

同所



印行所

山田活版所

京橋區和泉町五番地

絲と云ふはがなほ是は紙鹿は揚らざるなり其揚
絲乃役は離れぞと云ふに是れなん人民即ち信徒の
役目なるべし然れば即ち今日に於て絲目たる宗教
家を賣むると同時に揚絲たる人民も盡力せざるべ
からざるとも九春小僧の私言にあらざるべしと信
するなり知らせ世間の學者先生たちは生意氣の小
僧と云つて退けるや否や

明治廿年一月

九春小僧記

明治十九年十一月十五日版權免許
同二十年一月出版

定價金四十五錢

著述人

中山整爾

東京牛込區新小川町一丁目
目壹番地寄留

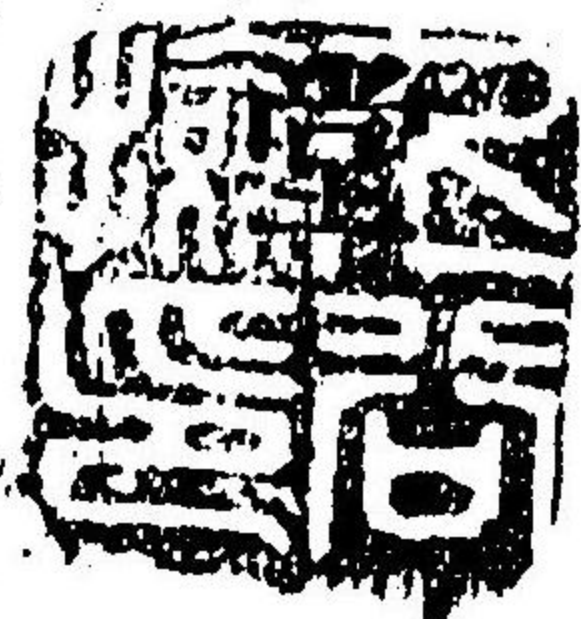
出版人

丸谷新八

東京京橋區三十間堀壹丁目
目五番地

發兌所

九春



印行所

山田活版所

京橋區和泉町五番地

九春堂出版書目

◎印ハ漢文牀 ●ハ譯文牀 ○ハ傍訓及平かな文 □學校教科書あり

藤原明衡朝臣原選
田中從吾軒先生校訂並序

◎本朝文粹 定價三圓特別賣價金二圓
圓購客ノ便利ヲ計テ全部

二帙ニ分テ每帙四卷價一圓但通
運送送料ハ弊堂ニテ辨ス來客ハ
其割合丈ケテ減價ス

小永井小舟先生序
有井範平先生補標

◎史記評林 定價十圓特別賣價七圓
購客ノ便利ヲ計テ全部

五帙ニ分テ每 五冊一圓四十錢
宛通運送送料ハ弊堂ニテ辨ス來
客ハ其割合丈ケテ減價ス

右二書全部御購求モ妨ナシ見本望ノ諸
君ハ郵券二錢送附アラバ進呈ス

法學士山田喜之助先生著

●英國私犯法 洋裝美本全一冊改
正廉價金七拾五錢

法學士山田喜之助君講述

●英國商船法 洋綴全一冊
定價五拾錢

英國ヘルツス氏著 中田直哉譯述

●政治考察論 版權免許 金五拾五錢

獨逸ブルンチリ氏著 湯目補隆譯述

●政黨論 版權免許 上册五拾五錢

敬宇中村先生序 湯目北水先生編纂

●歐米女權 全一冊 定價三拾錢

●自由官權兩黨人物論全二冊一冊定價
廿五錢

從三位勳二等柳原前光伯序

北島道龍師著 述 半紙摺美本
◎因明正理論與便 定價金二圓廿錢

芳野金陵著 釋日正輯

◎譚故金陵文抄 半紙摺 全二冊
定價金五十錢

清人沈文煥譯 岡田弘輯

◎日本神字考 正板全二冊大本
定價金五十錢

日清諸名家題詩 三木愛花情仙著

◎東都仙洞綺話 白紙唐 金二拾錢
本仕立

日清諸名家題詩 三木愛花情仙著

◎東都仙洞餘譯 白紙唐 金四拾錢
本仕立

右仙洞綺話 續テ柳橋品川及ヒ吉原
ハ細カニ其艶景嬌風ヲ寫シ事ノ詳文ノ

妙前篇ニ勝ル敷層加フニ才子佳人ノ小
說ヲ附録ス前篇ト共ニ購讀アレ
三木愛花情仙著

◎仙洞美人禪 白紙唐本製
全一冊 三拾錢

服部撫松先生纂評

◎勸繡像奇談 繪入美本
金六拾五錢

田中從吾軒先生著

冷弟 小永井小舟先生評
門人 三木貞一校

◎警醒鞭 木板 半紙摺唐
本仕立 全一冊
定價金三十五錢

服部撫松先生藏著

◎第二世 夢想兵衛胡蝶物語 版權
免許 半紙摺繪入美本前管二冊定價金七拾錢

服部撫松先生藏著

◎第二世 夢想兵衛胡蝶物語 近刊
後編

清人關桂林先生序 三木愛花情仙藏著

◎情天比翼緣 全一冊 極美西洋
風流仕立

繪像入定價金三十五錢

故東湖藤田彪先生著

◎銅版 回天詩史 小本全二冊
定價二十五錢

袖珍

三木愛花序 桑 願柳輯
◎小說字林 全一冊 定價金七十錢

高橋泥舟先生題辭敬字中村先生序
張瑞圖校本 松山麻山標註

◎標註 日記故事大全 中本全三冊
校正 美製 定價金五十五錢

精刻木板上等半紙唐本仕立
服部識一先生序 明月樓主人輯

三木愛花仙情 序 明月樓主人輯

◎新掌中詩學捷徑 折本全一冊
定價二十五錢

太田資逢纂輯

◎音順 六體字格 銅版一冊 定價
四拾錢

◎東京新誌合本 十部一冊 金廿五錢

◎春野新誌合本 同 斷

◎吾妻新誌合本 第壹號ヨリ第百卅
號迄各十部合本壹
冊金五十三錢

三木貞一君校閱 西森武城君編輯

林巽臣著 精刻木板半紙摺美 全二冊
◎俗解てのむ初學び
上卷定價金二十五錢○下卷
既刻定價金二十錢

林巽臣先生著 精刻木板半紙摺美本
全一冊

◎文場 假名遣早引 定價金二十錢

渡邊二舟先生新著 卷要 先生書法

◎四十 改正いろと

小學習字本上等大紙摺全一冊定價七
錢五厘郵稅四錢郵券代用稅共拾貳錢
◎四十 あめつち歌
大幅堅三尺巾二尺一枚摺定價五錢
郵券代用稅共九錢

鳥越未譽至輯

◎明治 眞草早引節用集大全

銅版摺 壹冊 四拾錢
細圖入白紙摺美本

◎千家 茶の湯客の心得

◎初學 漢文獨習捷徑 全壹冊 定價三十五錢

西森武城著 高齋單山書

◎習字 小學千字文

精刻木板半紙摺美本全二冊
定價金二十五錢郵稅半額四
錢郵稅代用ス

西森武城編輯

◎生徒 作文獨稽古 和製中本全壹冊
定價 貳拾貳錢 郵稅半額四錢

西森武城編輯

◎生徒 作文獨稽古續編 全一冊
定價金二錢 郵稅前同斷

七條峯太郎編輯

◎女子 女子作文楷梯 郵稅前同斷
和製中本壹冊
定價金廿貳錢

監頭作文要用字類

再版全壹冊 舊定價 金四拾錢
改正定價 金卅五錢

◎馬匹 飼養法完 細圖入平かな
定價三十錢

日本秋月種樹公題辭
同 高須治助君譯

◎馬術警策 全壹冊
定價四十錢

◎四民 算法早學 全壹冊小本銅鑄
定價貳十五錢

◎手形條例解譯 定價金拾錢

◎改徵兵令解譯 同 斷

◎徵兵 陸軍刑法治罪法俗解

附恩給令 全一冊定價十八錢
◎質屋取締條例解譯 定價十二錢

◎地租條例詳解 同 拾錢

◎商標條例解譯 定價金拾二錢
附證券印稅規則

服部誠一先生序桑野銳譯述
 ○英國蝶舞奇緣 繪入 美本二冊 金三十錢
 情史 蝶舞奇緣 美本二冊 金三十錢
 愛花仙史口譯 杉浦義方筆記
 ○神傳秘法 全一冊 定價金三十錢
 西洋綴 一名智慧の精環
 遊夢居士藏著
 ○花街膝栗毛 繪入美本金二十五錢
 服部誠一 秋山徳三郎著
 ○岩倉公言行錄 全一冊 金拾四錢
 肖像入 南園竹翠編述
 ○蝴蝶草誌 全二冊 金四拾錢
 繪入美本 夢想居士藏著
 ○內想慕 西洋綴 金三十錢
 誌一冊 權妻內幕 美本
 ○內想慕 藝者內幕 十六年十二月
 誌二冊 五日發賣禁止
 三木愛花情仙原作 戲蝶子補綴
 ○新橋藝者節用 全一冊 美本八景圖入
 八景 定價三拾錢

三木愛花情仙原作 戲蝶子補綴 平かな付
 ○娼妓節用 繪入美本全一冊
 定價金三十錢 一名吾妻所戀路のしをり
 ナエルスウエル子氏原著
 三木貞一君高須治助君合譯
 ○拍案地底旅行 再版 全一冊
 美本洋製 舊定價金九十錢
 石版密畫 改正原價金八十錢
 東條竹翠著
 ○婦女庭訓操の眞鏡 全一冊
 定價三十錢 繪入かなつさ
 ○花の露戀の戀路 繪入美本全二冊
 一冊 金拾六錢宛 油斷
 ○大敵吃驚叢談 美本 金拾六錢
 愛華三木貞一君譯集
 ○歐洲忠臣藏 西洋綴美製全書冊定價
 八十五錢 減價七拾錢 坐禪堂主人輯
 ○脩身心の寫畫 全書冊 木板
 日本紙綴美

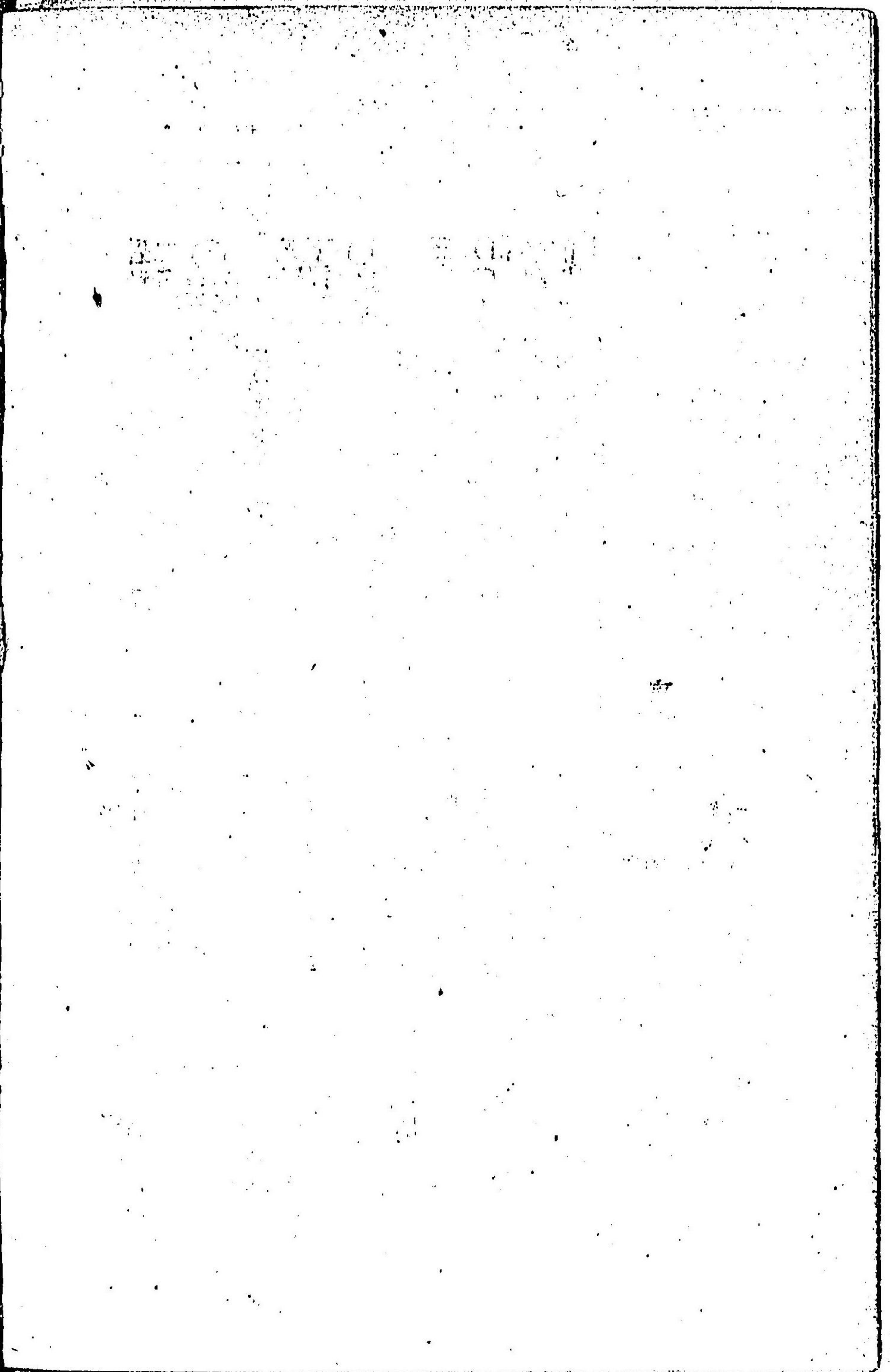
金貳拾五錢
 岩神正矣君編輯 ワシントン・グランド
 二名石版肖像入 平假名附
 ○米國前 虞蘭將軍全傳
 大統領 洋綴美製全一冊 定價卅五錢
 元田直光生題字
 下司盛吾君編輯
 ○檢稅至要 再版 小本全一冊
 美本洋製 定價金五十錢 郵稅不申受
 三木愛花仙史校訂並序
 重訂 ○太平記 近刻 美本全
 十二冊 近刻
 法學士山田喜之助先生校閱
 前川普佐二郎編述

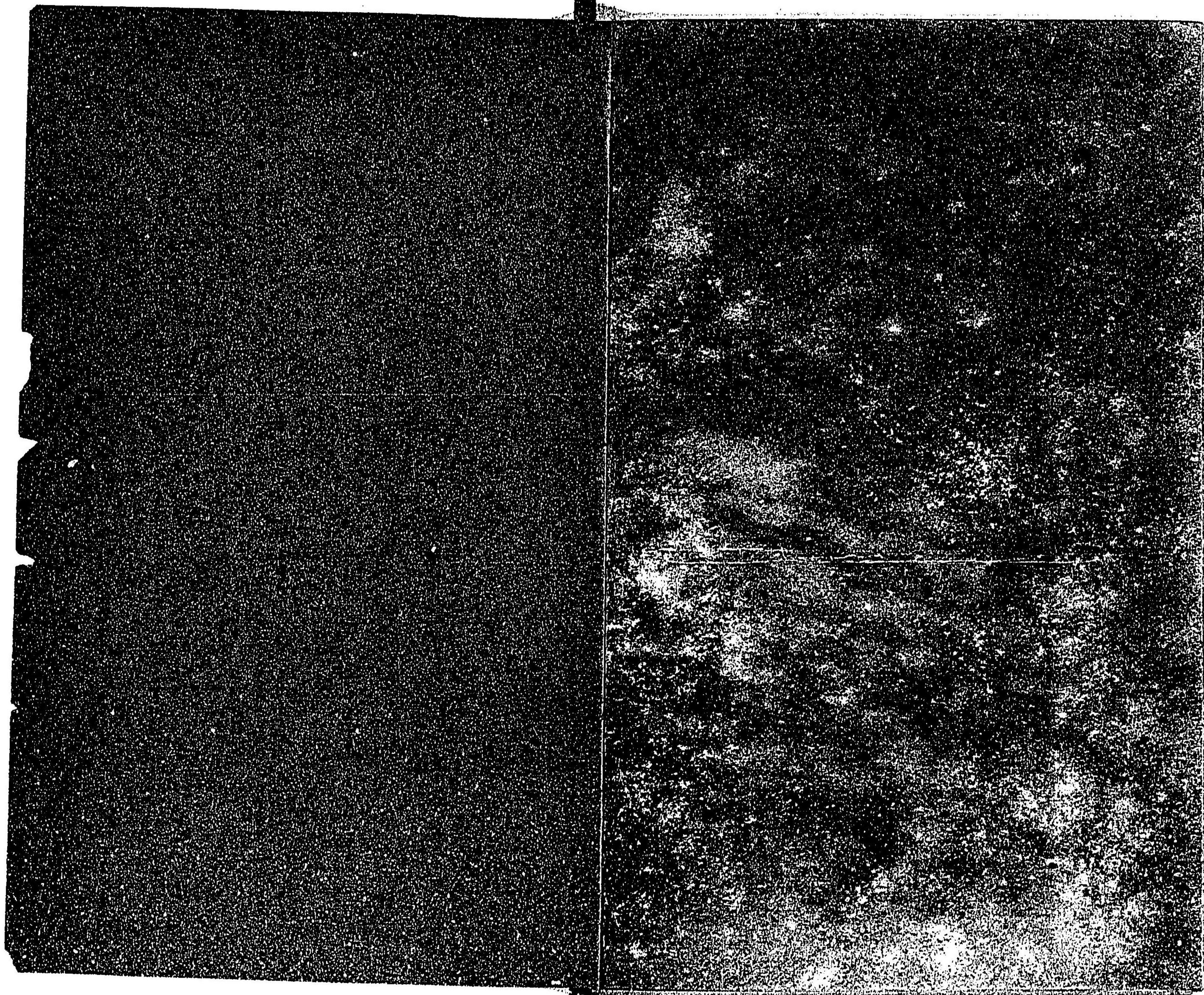
○批法律名家纂論 洋製全一冊
 評 文學士高田早苗先生序
 文學士天野爲之先生跋
 ○日本 維持確論 中山整爾著
 洋製美本全一冊
 定價金四十五錢
 ○東洋百家美人傳 洋製美本全一冊
 近刻 田中參先生著
 ○女學讀本 和製本
 全一冊 近刻 一名女大學
 西森武城編輯
 □尋常 作文教授書 上下全二冊
 近刻 小學
 ○獨米 教育施設法 洋製全一冊
 近刻 荻佛

書肆

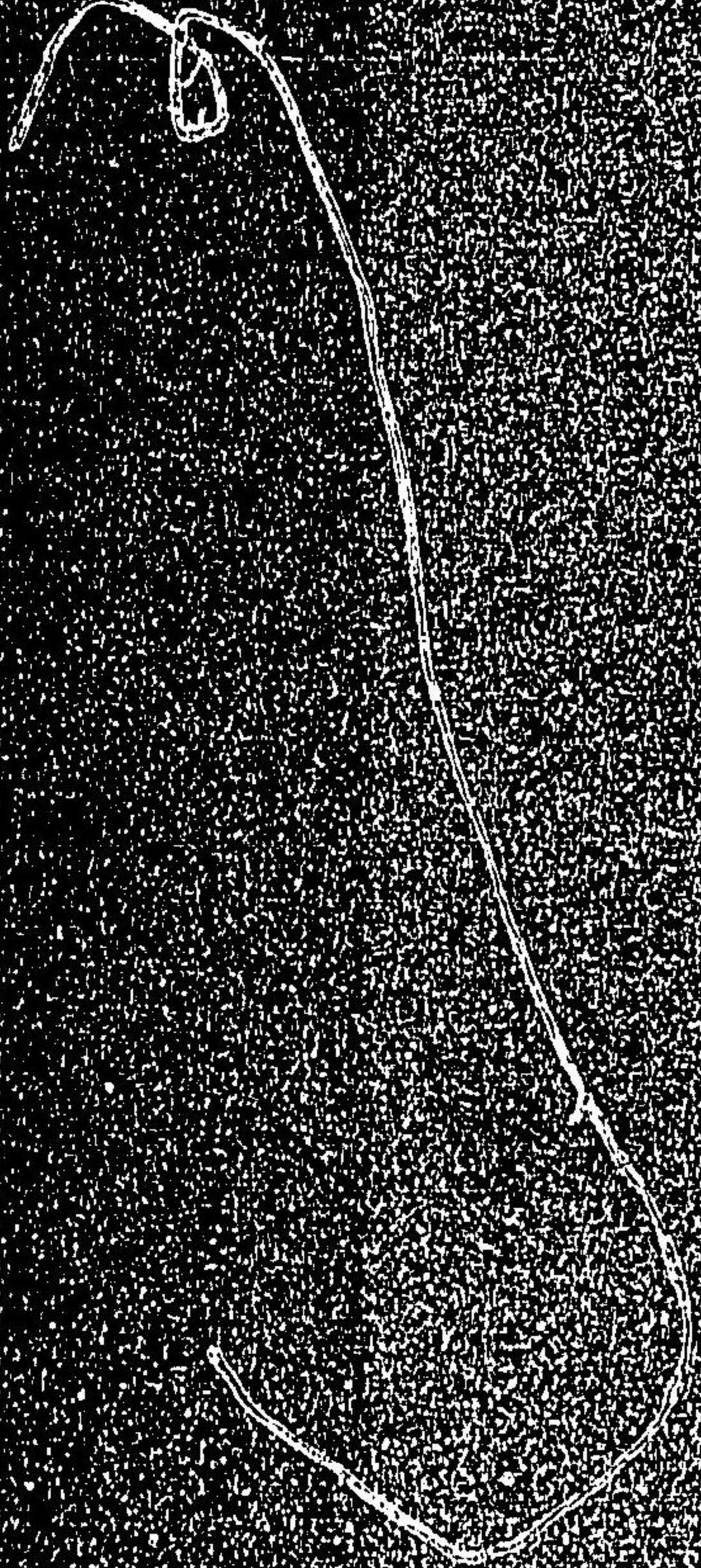
九春堂

東京京橋區三十間堀壹丁目五番地





26
271



013730-000-0

26-271

日本宗教維持確論

中山 整爾 / 著

M20

ABA-0216



